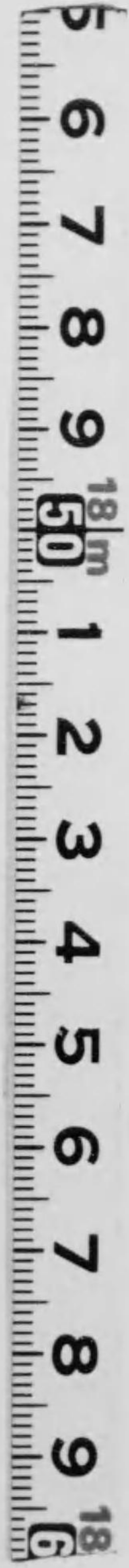


393

104

厚東史の評論



始



史蹟踏査
霜降岳
大登山會
記念

厚東史の評論

横山健堂著

山口縣厚狹郡教育會

393-104

序言

郷國の志士、青年、秋天に大舉して、霜降岳に登り、厚東氏の遺圖を追想す。此の日、此の會、また得難きの快心事なるかな。満山の草木、すでに黄葉、紅葉して、殘蟲の哀鳴、さらに秋感を切ならしむるあり。

厚東氏は、羣雄割據の世に、力を蓄ひ、銳を養ひ、強大なる先進國の間に介立して、拮据、經營して以て、漸く、その壯圖を伸ばさんとする。東は大内氏に肉薄し、北は、裏日本に出で、石見の吉見氏と鎬を削り、長門の北疆を壓し、南には、内海の魚鹽の利を占め、西は則ち海峡を領有して、豊前の一部を版圖に收め、鎮西の諸豪と角遂せんとするの勢を示すに至る。花の落るが如く、樹の倒る、が如く、その壯圖、中道にして亡ぶといへども、霜降岳の一城より起つて能く此に至

大正 9. 12. 23 内交

り、武實の盛時には、その版圖、表日本より裏日本に貫き、九州に跨り、本土の最西端を扼して、内外交通の要衝を掌握し、大陸と直接に交通、貿易を經營して、國富を培養し、文化を啓發す。厚東氏、累世の努力、豈、少小ならんや。此の形勢に據り、發展を遂げしめば、必ずや、雄を天下に稱するに足れり、不幸にして、その志、遂げずといへども、その雄圖、僥ふに餘あり。武實以後、世々、短命にして、且つ風紀、弛み、遂に衰亡に至る、惜しいかな。
抑英雄を吊するは、空しく追懷の涙を秋草に灑ぐ可らず。須らく、その經綸を論じて、我々雄心を鼓舞すべきなり

大正九年十一月三日

黒頭巾記

厚東史の評論

厚狹郡の郷土史より見たる厚東史、及び、山口縣の歴史に於ける厚東史。價值、延いて日本の文化史に於ける厚東史の影響等を評論す。

横山健堂 著

厚東氏の史實に關する記述は、別に有るを以て、茲には、専ら評論を述べべし。

霜降岳は、長門の名山として著聞す。山は高峻ならざれども、特徴ある山形を備へ、畫趣の掬すべきものあり。山上に、厚東氏の舊城址、なほ存するを以て、厚東山とも稱す。古來、山陽道、往還の衝路に沿へるを以て、その名、夙に知られたる。蓋し、厚東氏が、中世に、崛起したるも亦た此の如く、地の利占められたるべし。

岳麓の棚井村、則ち今の厚東村の中に、古刹、東隆寺あり。霜降岳とは、厚東川を隔つ。汽車の窓より望めば、寺の森を眺むべし。鐵道省の旅行案内に、霜降岳と東隆寺との名を逸せるは惜むべし。此寺は厚東氏、累世の菩提寺にして、厚東武實の開基に係る。武實のとき

を以て、厚東氏の全盛時代とす。乃ち、此寺の規模と、古城址とを併せ觀れば、畧ぼ、厚東氏の國力を想像するを得べし。

東隆寺といふは、頗る立派なる名なり。その語、佛者より見れば、道元禪師の詩に、西來祖道我傳東といへると同じく、祖師の道、東方に興隆するを意味するなるべきも、偶、厚東氏の興隆を祈待するの意にも通ずるを以て、撰定したるものなるべしと思ふ。寺は荒廢に歸し、全く、舊時の面目を失へるを以て、近來、地方の有志者、相謀つて、その再興に努力するあり今に於て、未だ功程の見るべきもの少しといへども、寺を訪ひ、當年の遺址を檢すれば、その規模の稍大なりしを察するに足るものなくんばあらず。武實を始め、厚東氏の墓域は儼として存す。明人、吳東舛の撰文の石碑は、江湖に紹介するに値するものなり。寺は山に倚り、自ら閑雅の趣致あり。厚東氏の盛時に、堂塔、悉く備はり、森林々鬱茂して、清泉、響きし頃には、定めて幽邃なる大寺の情趣ありしならん。寺の附近の田畝の土中より、往々、發掘する小さな陶製の八万塔、及び佛像は、考古學上、趣味深きものなきが、これ等は、厚東氏が、蝗蟲及び蟹を大驅除したりしとき、蟲供養の爲に造りしものなりと傳ふ。また以て、

厚東氏の民政と、信仰との一斑を想像するを得べき好箇の記念物といふべし。

二

厚東氏を論ずるには、霜降岳と東隆寺とを結び付けて、考察するを要す。

東隆寺には、嘗に、厚東氏の國力を想像すべきのみならず、その大陸文明との關係を信ぶに足るものあり。東隆寺は、吾國の文化史上の一名蹟として傳ふべきものにして、隨つて、厚東氏の歴史が、吾が國の文化に影響したる所以を考察せざる可らず。唯だ、厚東氏の歴史が、始んど湮滅に歸し、それ等の興味ある材料を探究するの困難なるを、遺憾とするものなり。

東隆寺の名物とする僧南嶺の石碑のみにてき、厚東氏と大陸との交通を想像せしむるに足るものあるが、寺前の田の中に、一株の白檀樹あり、當年、支那より舶來したるものの、僅に、殘存するものの一なりと傳ふ。思ふに、厚東氏は、山陽の西端に居り、海峽に近し。大陸との交通の要衝を占むるものといふべし、此の地位を占めて、時、恰も、邦人、海外に發展するの機運に際し、殊に、武實の時代には、吾が商舶、頻りに大陸に交通するあり。此時

に於て 武實が有爲の資を以て、此の機運に乗じ 大陸交通を圖りたるの事實は、蓋し想像するに難からず。武實のときには、大内氏の勢力、未だ海峽に伸びず、海峽以東、大内氏に至るまでの間、長門の國中に、幾多の土豪、割據せし中にて、厚東氏を推して最大となすべく、而して、その雄を致せしは、武實の才武に歸すべし。則ち、武實のとき、厚東氏の富と文化とは、大陸交通に由つて發達し、その領土の大ならざりしに比較して、頗る見るべきものありしを斷言するも、過當に非るべし。他年、大内氏が海峽を占領し、勘合印を擁して、大陸貿易を支配せしは、厚東氏が衰亡せし後にあるなり。

厚東氏が、大陸交通の港は何處なりしやといふに、武實が、長門國司に補せられて、海峽を支配するに至りし以前は、恐らくは、その本據地に近きところにあつたらん。霜降岳の西南に、宇部の低地あるは、此の意味に於て、注目し値すべし。宇部は、今、石炭に顯はる。その低地は、現に、四百餘町の稻田と化し、一望、爽快を覺ゆといへども、その開墾は、元祿年中に、棕梨權左工門の經營に始まり、今より二百年前の事に屬す。厚東氏の頃には、此の低地は、一面の海にして、霜降岳に近き厚東灣たりしは、その地形、及び地勢の變遷に

徴して疑無き事實たるべく、而して厚東氏は、霜降岳を本城とし、厚東灣を以て、その附屬港として、大陸交通の艦船をも、これより往來せしめたるなるべしと思ふ。則ち、厚東氏は、海峽に依らずして、厚東灣によりて大陸と、直接に、交通、貿易したりしなるべしと信するなり。併せて言はんは、宗祇の筑紫道記には、九州に渡るに、埴生より出船することを述べて、船もよひするほど、驛館の心地す、かくて船出して待ると記せり。此頃には、厚東灣、既に、頗る淺くなりて、埴生が、此の地方にての、九州渡航の港となりしならん。それより遙かに以前、厚東氏の盛時には、厚東灣に、出舟、入舟の帆影、滿ちたりしなるべし。

三

厚東武實が、長門國司に補せられて、入府せしは、建武元年五月十四日(西紀一三三四)にして、やがて長府に、近き四王司山に城を築きしは、厚東氏の大發展にして、その勢力の西漸を示すものなり。西漸は厚東氏の國是なり。

厚東氏は、武實に至つて、始めて周防の大内氏に對抗の勢をなすといへども、大内氏は、既に鬱然たる大諸候たるが故に、厚東氏が、東境に向つて伸びんことは困難にして、隨つて

西漸は、己むを得ざるに出つといふべし。然れども幸にして、西漸には希望あり。海峡を領有して、形勝に據つて版圖をなすこと、その第一、内外交通の要港を得て大陸貿易に一大便宜を占め、國力發展の根本をなすこと、これその第二なり。されば厚東氏の西漸は、古の露西亞帝國の南下に比すべく、その海峡を得たるの喜は、彼が、浦汐斯德を得たるにも比すべかりし。而して彼得大帝が、彼得斯堡を建てたる時、南下の國是を定めたと同じく、厚東氏は、始めて霜降岳に城を築きたるときより、西漸の國是は、雄々しくも樹立せられたるならずんばあらざるべし。

厚東氏が霜降岳に據つて一土豪たりし間は、大内氏より見ても、さまで意に介するにも足らざりしなるべきが、彼が崛起して、長門國司となり、海峡を領有して大陸交通の要衝を獨占し、幽谷を出でて喬木に移るに及びては、勢、大内氏の嫉視を免がる能はず。厚東氏の發展は則ち大内氏の目上の瘤なり。大内氏の雄圖も亦た厚東氏と同じく、海峡を頗有し、大陸交通の要衝を獨占するにあり。故に、大内氏と厚東氏とは、同じ線路の上に競走するものなりされば厚東氏は、西漸の翼漸く伸び、四王司山城を築いて、大に勢を張るに及んで、大内

氏と激烈なる衝突を起し、抗爭の結果、遂に厚東氏の衰亡を見るに至れり。

大内氏と厚東氏とは、衝突の、避く可らざる運命にあり。若し、厚東氏にして、霜降岳に安んじて、大内氏の幕下に屬することを甘んせしならば、厚東氏は、或は安泰にして、永續せしやも知れず。然れども、厚東氏の歴史に徴すれば、大内氏に隸屬したる事實は、初よりこれ無きが如し。厚東氏は、獨立したる土豪にして、漸次に、その大を致し、遂に先進の強大國たる大内氏に肉薄するに至れるなり。況んや、始めて霜降岳に城つきたる武光、東隆寺を創立したる武實、ともに材武あり、群雄割據の世に生れて、兵を提げて中原に往來し、雄心勃勃として抑う可らざるものありしをや、厚東氏が後進の小邦にてありながら、大内氏の下風にも立たず、聯盟を計るの舉にも出でずして、その滅亡に至るまで、抗爭を持續せるは、騎虎の勢、己むを得ざるものあるなり。

四

山口縣人、殊に長州に、厚東氏を名乗るもの現に少からず。概ね厚東氏の餘類なるべし

若し厚東氏をして、小成に安んじて、初より大内氏の下風に立たしめば、その歴史には

何等の精采の、語るべきもの無かるべし、彼が終始、その獨立を完くし、雄心逞しくしたりしが故に、霜降岳は、小城たりといへども、厚東氏の歴史、但ふに餘あるものあるなり。周防の大内氏に對し、長門の厚東氏として對抗したるが故に、厚東氏は、爲めに滅亡したりと雖、千歳の下、なほ氣焔あり。厚東氏は、雄心を抱いて、獨立、發展、規模を立てたるが故に、大陸交通の遺圖、追慕するに足り、その文化、始めて語るに足るべし、これを郷土史より見るに、初めて厚狹郡を統一したるものは、厚東氏なり。大内氏の戦勝以前に於ける、長門の最大なる大名は厚東氏なり。厚東氏は、長門一國の統一を完成せざりしといへども、長門の厚東氏として稱するを得べし。厚東氏の歴史は、唯だ一郡の歴史のみにてはあらざるなり、

厚東氏の系圖を考うるに、祖先は、物部守屋より出づと傳ふ。守屋、戦死の後、その子孫、此の地方に流され、此に土著して、厚東氏を稱するに至れり。始めて厚東太夫と通稱したるは、武基にして、大化六年、厚東郡の穴田に狩して白雉を得て、朝廷に献じ、よつて白雉と改元せられたりとの傳説あれども、改元の白雉に關する傳説は諸國にあり、長門だけにても諸

方にありて、その事、神秘に屬し、未だ容易に、その眞偽を定むべからず。武基の玄孫武晴に至つて、稍、家聲を張る。その子武光、始めて厚東郡司となり、本城を霜降岳に築き、厚東氏の武威、始めて伸ぶ。平家方に屬し、鵬越の戦にも參加したるが如し。源平盛衰記に、平家年來の伺候人、長門の國には、厚東入道武道と記せるは、則ち此の武光にして、光と道と、音便の轉訛による誤なるべしといへる説あり。武光は、厚東氏として、始めて中央に推し出したる第一人なり。武實は、武光の七世の孫なり。

武光より以後、國勢、次第に張り、西境の豊浦郡の豊田氏等と拮抗して、土豪たりしが、平家方の恩誼、なほ、その家系より離れず。武實の祖父、武政の如き、承久の院宣に應じて、京都に馳せ上り、勤王の軍に加はりしことあり。武實以前に厚東氏は、一箇の土豪たるに過ぎずといへども、中央の政局に、交渉を有したること此の如し。

五

霜降岳城は、日本の山城として、研究上、興味あるものの一なるべし。城は、厚東村の大字末信にあり。山は三峯より成り、南峯を前城と稱し、中峯を本城とい

ひ、茶白山といふは、北峯なり。尤も低きは茶白山にして、馬場の跡なほ見るべく、尤も高きは中峯にして、城隍の跡、僅に存すといふ。此城は、山陽道の往還に沿ひたれば、古くより行人の目に映じたるべく、今川貞世の道行振に、板垣の城といひ、陰徳太平記に、鹽降松などいへるは、皆、此城の事なるべしといへる説あり。

風土注進案に、此城を記して、厚東家繁昌のときは、霜降が嶺に、要害を構へ、棚井村の中央に、城郭巍々として、誠に宮殿とも覺しきものありしよし、今も御東などいへる屋敷あり、厚東城の西北に當り、城山の跡あり、引地の城といふ。城主は、包村といひし由。これは、厚東家の擲手のよし聞へ、大手は、今の吉見にて、吉見某の居城ありし由いひ傳へり。これに依れば、霜降城の外にも、棚井に城郭ありしと見ゆれども、棚井城の事は、他に考ふる舊記なしといへり。

著者は、未だ霜降岳に登臨せざるを以て、厚東城を詳論するを得ずといへども、略ぼ、その大勢を考ふるに、作戰の計畫上、その本城を守るが爲には、自ら支城無きを得ざるべければ、擲手には、棚井に包村城、大手には、吉見に吉見城ありしは有理らしく思はる。城池の

形勢は、實見したる上ならでは、立論し難きものあり。棚井の包村は厚東氏の家老なりと傳ふ。吉見は則ち石見の吉見氏なりとの世説あれども、誤なるべし。當年、吉見紀伊守ありて、小土豪なり、全く石州の吉見氏と家系を異にす、厚東氏の幕下なりしなるべし。

厚東城をば、その盛時には宮殿の如くなりしと、風土注進案に記せるは、誇張の説なり、山城は、要塞にして、元來、その居館にはあらず、天主閣を構うるも、元龜、天正の頃より始まる。厚東氏の全盛時の城郭は、未だ二百年後の元龜、天正時代の盛觀に比すべきものあらざるなり。元龜、天正の城制、大發達をなせし後といへども、城主の城郭と居館とは、自ら所を別にす。平城は暫らく措き、山城の頂に、城主が居館を設くることは、天下、極めて稀有なるべし。武田信玄は、甲斐一國を城郭となして、別に、城を築かず、その居館は、今に至つて御館オヤカと稱し、僅に隍池を環ぐらせるのみなり。著者の研究に據れば、城主が山城に住居したるは、豊後の竹田城のみなり、あらゆる日用品、食料等、すべて、これを山下より持ち運ばざる可らず。生活の不便、實に想像するに餘あり。山城は、唯だ作戰上の要害たるなり。されば、厚東氏も警備の必要上、霜降岳の地勢を利用し、山腹、もしくは山腰に據

つて、居館を構へしなるべし。山頂に生活したるにはあらず。

霜降岳、及び厚東城に關する、幾多の傳説口碑に存するものあるべし。出來得るかぎり、これを蒐集して採録せんことを望む。山麓に、持世寺温泉あり、閑雅なる一仙郷なり。持世寺には、厚東氏の某姫に關する傳説あり。

六

厚東氏の歴世の中には、武實を特筆せざる可らず。霜降岳に登臨して、厚東氏の昔を偲ぶ者は、希くは、武實の名を記せよ。

武實の傳記の詳細なるものは傳へらすといへども、その大畧は、家譜及び雜書、口碑等に存す。東隆寺に、武實の肖像あり。それに由つて見れば、堂々たる風采を有し、その人物も想見するに足るものあり。厚東氏は、元と平家に因縁を結び、その血管には、勤王の血、流傳せしを想像せしむるものあり。鎌倉幕府に對しては、稍、反抗の志を有せしもの如し。承久に勤王し、建武に勤王し、それによつて、家聲を揚げ、領土を擴張したり。足利尊氏、九州より西上するとき、武實が、海峽に占據するを以て、力めて彼を懷柔し、それに由つて舟

軍の便を得たる、ことあり。此の一事を以て極論すれば、武實が、前日、勤王の功、水泡に歸するが如しといへども、當時の戰爭、新田、足利兩氏の抗爭に本づき、武將の向背、必ずしも一々、順逆を以て論ず可らざること、關ヶ原戰に於ける豊臣氏の宿將、加藤、福嶋、黒田等の態度と相似たるものあり。要は、その平生の志業に於て見るべきのみ。厚東氏は、武實の歿後も、南北朝に對し、その態度に多少の統一を缺くといへども、大跡に於て、大内氏は北朝に據り、厚東氏は南朝に據つて抗爭し、肥後の菊池氏とも氣脈を通じ、大内氏に攻落されて西王司山城を去るとも、菊地氏に奔れり。されば、當時の武將の色彩を區別するときには、厚東氏は南朝方なりしといふを得べし。

武實は、信仰の人なりしと見ゆ。其の夢に、生菩薩、吾が郷に入ると見て、翌日、南嶺和尚に逢ひ、遂に、これを懇請して、東隆寺を開くに至れる話は、世間に著聞す。船木の瑞松庵は名刹にして、名勝を兼ねるものなるが、その開山は石屋和尚なり。石屋和尚は傑僧なり。長門深川の太寧寺の開山も此の和尚なりし。太寧寺は大内氏の寺なり。石屋は大内義弘と交情ありて、義弘の爲に、南北朝の統一を斡旋したり。大内氏に親しき石屋が、同時に、また

厚東氏にも因縁ありしと見ゆ、信仰には國境無し。

武實は京都にて没し、遺言して淨名寺に葬る淨名寺は東隆寺の末寺なり、武實は、霜降岳を根據地として、海峡に伸び、中央の舞台に活動したる名士なりし。されば當時の霜降岳城には、上方よりも、大陸よりも、輸入したる文化の華、燦然として、開いて、見るべきものありしなるべし。

七

厚狭郡には、古城址少からず。霜降岳及び、その大手、搦手の支城を除き、遺址の尋ねべきもの、二俣瀬に鷹子山あり、埴生に埴生山あり、内藤氏の家人、埴生若狭守の居城と傳ふ、西吉部の字藤ヶ瀬にも古城址あり、本丸、二ノ丸、三ノ丸、東北の谷に御城村等の名存して、規模、頗る見るべく、戦國時代の城たるを知るべし。志多城址は、万倉村、大字奥万倉にあり、大内の家臣、杉氏の遺址なり、厚狭町の大字郡村にも古城址あり、その東南には茶臼山あり、城址なり。同じ厚狭の中に塚野原山あり、冷泉判官隆豊の古城なりしと傳ふ。隆豊は、天下に名ある武士なり、その遺址保存せざる可らず。出合村の大字、山野井に路鬼山あり、

三河越中守路鬼の居城なりしといふ。路鬼は、傳説中の人物らしく想はる、天狗岩を取つて庭石としたりしが爲に、その崇を受けて死せしと傳ふ。王喜村の大字松屋にも古城址あり、その麓に馬場あり。吉田村には、吉田氏の古城址あり。

かくの如く、數多の古城址ありて、その歴史の徴すべきものもあれども、多くは詳かならず。而してかくの如く數多の城址あるは、郡中がかくの如くに分裂したりし古を想像せしむるものなり。天下の進運は、分裂より統一に向ふ。一郡を、始め統一したるものが、則ち此の霜降岳城なるを思ふときは、厚狭郡人、須らく厚東氏を記念せんばある可らず。

郡中の古城址の中にて霜降岳に次いで標出すべきは、北部の、吉部村なる古城址なるべし。昔は荒瀧の古城址と稱す。日本紀に柵戸あり。柵は城と同じくキなり。柵に附屬する柵戸あり、吉部は則ちそれなるべし。されば、此の古城は、内藤隆春の居城なりしと稱すれども、實は、古の柵にして、郡中にて最古の城址なるべし

八

秋天、まさに爽朗なるとき、霜降城上に登臨して、厚東氏を吊すれば、眼界の風物、悉く、

感慨を催うさしむべし。

(十六)

攝津・長柄の鶴萬寺の古鐘は、元文中、宇都の土中より發掘したるものにして、銘には、永和五年、長州、厚東郡、松江山、普濟禪寺とあり。永和五年は西紀一三七九にして、南北朝の合一より四年前、まさに十四世紀の末期に當る。此の古鐘の一箇といへども、五百餘年前の、此の地方の文化を語るものなり。東望すれば、山中あり、宗祇の筑紫道記に、山中といへるところに、聊かなる社ありて、木深きかたはらに、名かくれぬほど、松虫の鳴からしむるも、あはれ淺からずと見ゆ。山中は、今も溪樹、泉聲、夜、殊に詩興多し。船木は、神功皇后、征韓のとき、船材を採り玉ひしところと傳ふ。宗祇の記行に、船木といふところに、昔、都、相國寺にて、折々、頼み侍る人、此の山里を占めて、吉祥院とてあり。今兩夜の契り、万年の昔の語らひにも劣らずといへり。宗祇が、都にて親しく語らひしといへば、文學にも淺からずして、ものあはれをも解する人なるべし。その名は傳はらざれども、乱れたる世には、堂上、公卿達が、京都を去りて、山口に集りしと同じく、中央の人物、適處を求めて各所に分散し、知らずくの中に、地方分賢の事實、自ら社會の上に行はれたり。吉祥

院のあるじも、その隠くれたる例に外ならず。這般の地方分賢が、地方の文化を開發したるの功は、大なるものあるべし。

厚狭には、秀吉も九州渡航の途次、再び來り過ぎて、枕流亭に憩ひしことあり。英雄の足跡、此に印するも、おもしろからずや。此の地方が、山陽の要路なるが故に、參勤・交代の九州諸大名の行列、此地方を賑はしたるも昔語の一とすべし。その餘、天下の人物、此を経過したるもの、何ぞ枚擧するに堪わんや。伊能忠敬も過ぎ、高山彦九郎も慨然として過ぎ、古川古松軒は、此の地方を過ぎて、始めて石炭を見て驚異したるは、その紀行、關路の鈴に詳かなり。此の地方の人、石を焚いて風呂を湧かすと記せり。霜降岳は、萬古、依然として、山の下行く古今の、帝王も英雄も、美人をも照らしつつあり。郡中に四大川あり。厚東、有帆、厚狭、及び吉田川とす。郡中の歴史も、經濟も、此の四大川に沿ふて、自ら四大區劃をなす。厚東川には霜降岳あり。宇部あり、有帆川には高千穂、及び小野田あり。厚狭川には厚狭の平原あり、吉田川には吉田あり、すべて、人物、名勝、語るべきもの少からず。寢太郎祠は、開墾の教訓を語る寓話として傳ふべし。皇后石は、厚狭川の畔にあり、百濟の琳聖

(十七)

太子の妃、太子を慕ひて來朝し、此の石に憩ひしといひ傳ふ。厚狹川に赤間關硯を産するは特記せざる可らず。赤間關硯は、日本の硯の上乗なるものなり。火の峯は、古の烽燧の址、松岳は、花山帝、駐驛の處と傳へ、蓮台寺は、則ち、その御開山なりといふ。

宇部の平原を思へば、併せて高千穂の平原を記せざる可らず。高千穂の開墾の創業者は、榎本遠江にして、その遺宅、なほ存すと云ふ。遠江は、毛利氏、三百年間に於ける名臣の第一流者と稱すべし。彼の名は、江湖に喧傳せずと雖、屹然たる大政治家なり。その著眼、つねに高遠に馳せ、志、大局に存す。万治年中に制定されたる万治制法は、毛利氏の憲法ともいふべきものにして、毛利氏の國體は、これに由つて定まり。維新に於ける防長人の大業にも、與つて、遠因をなせること少からずとすべし。厚狹郡の開墾事業は、實に、彼が遠大なる財政策の一部の實現されたるものに外ならず。防長人が齊しく記念すべき此の大人物の遺蹟を、此の地方に有するは、殊に、保重せざる可らず。

稱徳紀に、神護景雲二年、長門の豐浦、厚狹の二郡、養蚕に宜しきを以て、これより後、租税に、綿を以てせんことを請ふの記事あり。此の地方が、他に率先して、農工業に勉めたるの一斑は、これを以て推知すべし。今、霜降岳に近して、工業の氣勢、頗る揚るものあり。此の郡が、古今の歴史を一貫して、農工業に、誇るに足るべきの材料を有するは、郷人の、意を強くするに足らずんばあらざるべし。

霜降城上の詩趣、書趣は、雲の如くに湧いて已まざるものあるべし。山上、樹木少くして、展望、尤も開濶なるべし。春は、遠近の花を望み、秋は溪壑に紅葉を探り、衣を千仞の嶺に振ひ、足を温泉に濯いで歸る。春秋、一日程の登山遊とするも會心なるべし。今、著者は、専ら史論を試むるを以て、汎く、他事に論及せず。山上の大觀は、凡そ此の如し。

+

厚東氏の史論、もし幾多の新史料を得ば、更に評論すべきものあらん。今、未だ多く題材を得ざるを遺憾とす。

厚東氏は、始めて、此の史的興味に満ち、且つ、現在に於ては、經濟的に觀察の興味を有する厚狹郡の、最初の統一者なり。厚狹郡の文化の發達に於ける大なる恩人なり。郡の西、吉田川に沿てひ吉田あり、奇兵隊の陣地にして、高杉晋作の墓あり。高杉は、維新第一流の

人物、その人、此の地方の文化に、多くの關係を有せずと雖、その陣地と、その留魂處とを、併せ有するは、彼が驚天動地の、快事業、快心事を俾ふに足り、以て、青年を鼓舞するに足るべし。厚狹郡に於ける史蹟は、霜降岳と、吉田とを推して雄とすべく、人物に於ては、厚東武實、榎本遠江、及び高杉晋作を擧ぐべし。然れども、その中、此の郡地方に、尤も深き宿縁を有し、純呼として郷土の名物となすべきは、霜降岳と厚東武實となるべし。

著者は、來る七日、厚狹郡長を始め有志諸君と共に霜降岳に登り、山上に於て、厚東史論を試むるの豫定なり、躬その舊蹟にのぞみて、親しく古風を檢討せば、五百年前の光景、恍惚として眼前演に現はれ、著者を啓發して或は新見を提唱せしむるものあらん。抑、山嶺、古名城址の演壇、世間、未だ聞かず、著者と諸君と、ともに痛快とするところならずんばあらざるなり。

大正九年十一月一日、明治神宮、鎮座祭の夜、 著者再記

史蹟踏査
霜降岳
大登山會
記念

厚東氏史要 厚東氏系圖

谷東百合雄稿

山口縣厚狹郡教育會

厚東氏史要

◎厚東氏は物部守屋の子孫なり。守屋の遺子武忠皇極天皇の時、始て居を厚東郡棚井の庄に定め厚東を以て氏とす。厚東家實錄後中將の官を賜はりて厚東郡の主となる。白鳳十四年卒す。

一四一六
奈良時代
孝謙天皇

◎二世武基は厚東太夫と通稱す。棚井邑に恒石八幡宮を建立す。棚井外四箇村風土記大化六年厚東郡穴田を狩りて白雉を得、之を孝徳天皇に献す。叡感不斜、其恩賞に位を授け、天下に大赦を行はれ、白雉と改元し給ふ。國史大辭典天平勝寶八年卒す。

一五八三
藤原氏權權時代
醍醐天皇

◎第五世武仁は厚東太夫と通稱す。この比蟹多くして農作物を害しければ、武仁思ふること甚しく、之が除害の供養に、多數の寶塔を作りて土中に埋む。八萬塔即ち之なり。厚東家實錄又吉見邑には持世寺と、棚井邑には安養寺を祈願建立す。延長元年卒す。棚井外四箇村風土記

◎第六世武晴は厚東小太夫と通稱す。須惠邑に萬福寺を、棚井邑には神宮寺を祈願建立す。厚東家實錄安和元年卒す。

一六二八 藤原氏權權時代
冷泉天皇

◎第七世武光は厚東左衛門太夫と通稱す。厚東郡司に長門の守護職を兼ね。厚東家霜降城を創築す。長曆元年卒す。

一六九七 藤原氏權權時代
後朱雀天皇

◎第八世武景は厚東太夫と通稱す。厚東郡司に長門の守護職を兼ねること父の如し。厚東家實錄 寛徳二年卒す。

一七〇五 藤原氏權權時代
後冷泉天皇

◎第十一世武時は厚東太夫と通稱す。壽永三年正月平宗盛安徳帝を奉じて屋島より攝津の福原に歸り據る。又城を一の谷に築き、近畿山陽及び南海の兵を徵す。集るもの十萬餘。武時亦之に應ず。然れども一の谷の落城と共に、遁れて國に歸り、建長三年卒す。厚東家實錄 山口縣史略

一九一一 鎌倉時代
御深草天皇

◎承久三年五月後鳥羽上皇は、執權北條義時の專横を憤りて、之が討伐の兵を徵し給ふ。大日本歴 武政(第十二世)大義を重んじ、上皇の徵に應じ、關東の兵十萬騎と濃尾の間に激戦したれども、衆寡敵せず遂に遁れて國に歸る。厚東家實錄 嘉元三年卒す。大日本歴集成

一九六五 鎌倉時代
後二條天皇

◎第十四世武實、初め太郎と稱せしが、中頃左衛門尉といひ、後入道して崇西と改む。

第九十六代後醍醐天皇素資英明、夙に武人の專横に惡み給ふ。此時鎌倉には執權北條高時あり。日夜遊宴に耽り、權臣事を恣にせしかば、天下の人心日に北條氏を離れたり。天皇機に乗じて、王政恢復の謀を廻らし給ふ。高時愕然、諸國の兵を徵す。大日本歴 史集成

此時厚東武實は兵を率ゐ、水路兵庫を経て京都に入り、高時の軍に投ず。厚東家實錄
高時承久の先例に倣ひ、帝を遠島に遷し奉らんとせしかば、天皇は夜(元弘元年八月二十四日)潜かに京を出で、奈良を経て、笠置に幸し給ふ。近畿中國及び新參の關東勢賊を作つて笠置を攻む。城遂に陥り、高時無道、帝を隱岐に流し奉る。然るに元弘三年閏二月帝の隱岐を遁れ給ふ此には、勤王の軍各地に起り、官軍の勢頗る振ひ、山陰の豪族高津道性は、大軍を率ゐて厚東氏を誘へり。厚東氏これより官軍に附屬し、高津の軍に與力して、長門探題北條時直を攻め、一旦利を失ひしかども再び之を攻めて捷きり。後建武中興の政成るに及び、武實は功により長門の守護職を賜ふ。

建武二年十一月足利尊氏鎌倉に據りて反す。帝新田義貞等を遣して誅せしめ給ふ。然るに義貞は足柄、竹の下に破れて京都に歸る。尊氏義貞を討つを名として上京す。義貞。正成等防戦甚だ努めしと雖、天下を舉げて殆ど賊に應せしかば、官軍利なく帝遂に比叡山に遷幸し給ふ。建武二年十二月長門守護厚東武實、安藝守護武田信武等は、相繼いで賊のために入京せり。延元元年正月北畠顯家兵五萬を率ゐて、比叡山の行宮に着す。これより官軍漸く振ひ、顯家、義貞共に京都を衝きて之を恢復す。尊氏丹波に奔り、兵庫に出でて此地に據り、黨を西國に募る。厚東武實は長門の兵を發し、大内長弘は周防の兵を發し、船五百餘艘を以て兵庫に會せり。尊氏これを率ゐて一旦京都に向ひしかども、戰捷たずして西國に奔る。

延元元年四月尊氏其弟直義と共に、大友、少貳の兵を率ゐて大宰府を發し、船を博多に舩して長門の長府に至る。備、藝、防、長の諸將來り應ず。これより備後國鞆津にて部署を定め、自らは水路にて兵庫に向ひ、義貞の軍を破りて京都に入る。帝再び比叡山に行幸し給ふ。厚東家實錄 山口縣史略

二〇〇七

藤原氏權時時代
後村上天皇

大日本歴史集成 厚東武實は京都より歸圖して、延元四年棚井の庄に東隆寺を建て、鎌倉の僧南嶺和尚を請じて、之が開祖とせり。後村上天皇は本寺に以て寶祚の長久、國家安全の祈願所となし給ひ、持明院統の崇光院よりは、正平六年寺位を諸山に進められ、安國東隆禪寺なる勅額をも給はれり。後南嶺和尚の客館とせしものを寺とし、東隆寺第一の末寺に置きて、淨名寺といふ。厚東家實錄 山口縣史略 武實正平三年京都に卒す。

遺言により淨名寺に葬る。厚東家實錄

◎第十五世武村は駿河守と通稱す。元弘の役其父と共に忠戦ありければ、功により豊前國規矩郡を拜領す。厚東家實錄 建武二年尊氏鎌倉に於て反するや新田義貞勅を奉じて之を討つ。厚東武村手兵を率ゐて從軍す。然れども官軍利なく。京都に歸るに及び尊氏尾して上京す。武村中頃變心して尊氏に應じ、賊のために北畠顯家と八幡山に戦ふ。山口縣史略 厚東家實錄 既にして後醍醐天皇吉野に遷幸給ふ、正平二年八月楠正行、紀、泉、攝の兵を率ゐて京都に迫らんとする勢を示せしかば、尊氏は高師直兄弟をして之を拒がしむ。厚東武村賊軍に従ふ。翌三年正月正行戦死す。師直兄弟此度の合戦に功

ありしかば、心大いに驕り種々の悪行あり、直義之を誅せんとする。師直兄弟亦遠に兵を募る。武村之に應招し、尊氏、直義を京都に圍む尊氏愚論して事なきを得、武村は足利將軍より長門の守護職を賜はりて國に就き、四王司山に城く、厚東家實錄 大日本歴史集成 山口縣史略 柳井外四箇村風土記 後武村南朝に歸順す。

二〇〇八
吉野朝時代
崇光殿院

當時周防山口に大内氏あり。北朝に屬して、厚東氏の勢盛なるを制せんがため、自ら兵八萬に將として、四王司山を襲はんとす。時に大内氏の家老陶弘綱諫めて之を止め、杉又二郎等の部將をして代り攻めしむ。正平四年六月六日兩軍の兵、大いに四王司山に戦ふ。武村死守して城容易に陥らず。大内勢止むなく兵を小月に收む。既にして大内弘綱來り援くるに及び、十二月城遂に陥る。武村自刃す。年五十八。厚東家實錄 武村生前寺院を建立せしことありしかども、然も性暴虐、社寺に放火し、僧を逐ひ、無辜を亡する等種々の不徳あり。嘗て中山廣福寺に參詣し、戯に其本尊を誹謗し、且其所持せる扇子にて腰部を打擲せしかば、腰斜に屈したりといふ。厚東家實錄 ◎第十六世武直は駿河太郎と通稱し、後に長門守となす。正平四年四王司の落城に際し

二〇一三
吉野朝時代
後光殿院

ては、吉野にありて此戦に與らず。六年十一月吉野を出でて長門に下國す。厚東家實錄 山口縣史略 十一月十三日長府の城を攻め落し、直ちに山口に向はんとす。此時長府の將黒川貞信夜に乗じて來り襲ひ、武直豊前に奔る。後戦捷て再び歸國し、南都山城に居る。此月長門守護職を賜はる。厚東家實錄 山口縣史略 然るに山口の大内弘世は其將陶弘綱をして來り攻めしめしかば、武直敗戦、恨を含んで海上より加賀國に落行き、正平八年此地に卒す。厚東家實錄

二〇一九
吉野朝時代
後光殿院

◎第十七世義武は長門左衛門又越後守と通稱す。足利將軍より防長二國の守護たることを許容せらる。山口縣史略 厚東家實錄 義武厚東氏復興のため、種々事を圖りしかども、常に戦利なく、大内義弘の將津原義是のために捕へられ、遷されて山口に居る。後遁れて霜降城に據りしが、大内弘世が軍のために落されて卒す。厚東家實錄 一説に義武霜降城を棄て、遁れ、四王司山城の陥落と共に没したりともいふ。時に正平十四年二月なり。山口縣史略

東隆寺ヲ建立ス

(15)

武村

厚東駿河守

新田義貞ニ從軍ス

足利尊氏ニ屬ス

高師直ニ屬ス

長門守護職

南朝ニ歸順ス

四王司山城ニ據ル

(16)

武直

厚東長門守

南朝ニ屬ス

長府城ヲ奪フ

(17)

義武

厚東氏ノ恢復ヲ計ル

大内氏ニ捕ヘラレテ山口ニ居ル

霜降城ニ據ル

大内氏ノタメニ滅サル

厚東氏系圖

武忠⁽¹⁾

中將
厚東郡主

武基⁽²⁾

厚東太夫
白雉ヲ献ズ

武道⁽³⁾

厚東太夫

武綱⁽⁴⁾

白松太夫

武仁⁽⁵⁾

厚東太夫
八萬塔ヲ埋ム
安養寺ヲ建立ス

武晴⁽⁶⁾

厚東
萬福

武光⁽⁷⁾

霜降城ヲ創築ス
厚東左衛門太夫
厚東郡主
長門守護職

武景⁽⁸⁾

厚東太夫

武能⁽⁹⁾

厚東小太夫

武朝⁽¹⁰⁾

厚東新左衛門尉

武時⁽¹¹⁾

厚東太夫
平宗盛ニ屬ス

武政⁽¹²⁾

厚東太夫
後鳥羽上皇ノ徵ニ應ジ
北條義時ヲ討ツ

武仲⁽¹³⁾

厚東太夫

武實⁽¹⁴⁾

厚東太郎

入道崇西
北條高時ニ屬ス
後醍醐帝ノ繪旨ヲ奉ズ
長門守護職
足利尊氏ニ屬ス
東隆寺ヲ建立ス

武村⁽¹⁵⁾

厚東駿河守
新田義貞ニ從軍ス
足利尊氏ニ屬ス
高師直ニ屬ス
長門守護職
南朝ニ歸順ス
四王司山城ニ據ル

武直⁽¹⁶⁾

厚東長門守
南朝ニ屬ス
長府城ヲ奪フ

義武⁽¹⁷⁾

厚東氏ノ恢復ヲ計ル
大内氏ニ捕ハラレテ山口ニ居ル
霜降城ニ據ル
大内氏ノタメニ滅サル

大正九年十二月十五日印刷
全 年十二月十五日發行

發行所

山口縣厚狹郡厚東村六四七番地

寺

編輯兼
發行人

全縣全郡全村全番地
永井完道

印刷人

全縣全郡船木町七十番屋敷
森田孫一

印刷所

全縣全郡全町全
春水館

393
104

終

